随想

百度石と歴史の変化

中林幸夫
（会員　香川県綾歌郡国分寺町）

私の子供のころは近所の人が病気になったら近くの神社に出向いて、お百度参りをするのが習慣であった。病気を治す方法が他になかったからか、大人も子供も真剣に石段を登り下りして、お百度参りをしたものである。そのため、どこの神社にも百度石はある。

しかし、戦後になってから病人が出たからといって、お宮へ行ってお百度参りをする人はいなくなった。お百度参りをしても効果が無いことが、みんなが悟ったのである。神様を信じないわけではないが、神様の信用度が激減してしまっているのである。

お百度参りの習慣が、いつ頃から始まったかについて調べてみると、平安時代の末期ではないかと言われている。古い記録によると『永昌記』（天永元年、一一一〇年）山城加茂神社にお百度参りの記録が見える。

私は昭和五〇年四月、佐伯に着任して歴史探訪を始め、梅の屋の駅弁の表紙に描かれている白潟遺跡に行き、遺跡の模型を見学して、社務所のなかに雑然と並べられている発掘の土器類を見学した。

ちょうど宮司さんが入ってきたので、土器の発掘などについて尋ねると、「この遺跡は昭和三十二年に発見され、発掘が行なわれて、その後、遺跡の模型が作られたが、最初のうちは見学に来る人も多かったが、最近では来る人もなく荒れかけている」とのことであった。

「なぜ、発掘品を整理して飾らないのですか」と話すと、「みんなあまり関心がないのか、そのままですわ」と、笑った。「もったない」と話すと、「発掘品が大事な物であることを、みんなに話してくれませんか」と言われた。

その後、しばしば若宮八幡様を訪ねていると、先代の宮司、緒方さんと仲よくなり、近辺の歴史感を話してく

れるようになったが、学術的なものはなかった。

若宮八幡という呼び名のお宮は、全国では五十数社あるとのことである。

次にもう一つの氏神さん、五所明神は近くであるため運動をかねてよくお参りしていると、神主さんとも自然に親しくなった。

先代の宮司、橋佐古さんは話し好きで、「暇なら話して行きませんか」と言い、歴史問題から自分の身の上話まで聞かせてくれた。

冬の寒い時、「本来なら、お茶でも入れてゆっくり話したいのだが、私は養子なもので家に呼ぶと家内がいい顔をしないんで」と言って、冷たい風の吹き抜きぬける中で話し込むこともあった。

五所明神は何回も火災に遭っているので、記録や宝物はなにも残っていないとの事であった。

私にはよくわからないが、氏子の人々が神社に対してどれだけ信仰心を持っているかである。

私が現在住んでいるところは、昔ながらのしきたりが強く、他からの移住者も現在は四分の一ほどになっているが、お祭りや獅子舞いや部落の行事に参加させずにいる。これは、一種の差別問題ではないかと言ってみたが、誰からも相手にされない。

昨年、はじめてお祭りに参加させられ、祭りの大変さを知らされた。祭りは神主がするのではなく、陶冶（とうや）と呼ぶ氏子の代表が仕切るのである。

お祭りは一大行事と考えており、小高い山の神社から下のお旅所まで御神輿がお下がりするだけのものであるが、御神輿の行列は次のようであった。

神幸祭　渡前前の式、祓いの祝詞、おうつし、お道具

　　わたし、浦安舞い

御輿出立つ、神宝持、—、榊、—、白弊、—、金弊、—、鏡—、大弊—、麻、—みこし（一二名）、—神具、—すり金、—より棒、—櫃、—賽銭受け、—宮獅子、（約十名）、計約五十名

お祭りに先立ち、道の補修、清掃、御神輿および神具の組み立て、幟立て、幕張りなどの準備に約一週間、延べ二百名が参加した。

私が考えさせられたのは行列のなかに『麻』があり、古代には麻は重要な意味を持っていたように思えてならなかった。

祭りは神職がするのではなく、部落民全員が力を合わせてすることを知り、お祭り本来の意義があることを知った。

今、各地でイベントを兼ねお祭りが行われているが、住民の力とお金がなければ何もできないのである。

思い起こせば、佐伯在住中に行われた大きなイベントは皇太子・美智子妃殿下を鶴見町にお迎えしての第一回豊魚祭、大入島で行われた『ハウンドドック』、毎年番匠川で行われる花火大会、春のお城祭りがあり、警察・海上保安署・消防署は裏方として参加するが、祭りとしては純然としての参加ではない。住民だけの祭りではなく、役所指導の祭りである。

天皇・皇族を迎えての行事は、警備などで計り知れない苦労と責任があり、一般人には考えられないことがある。

千年以上の習慣が崩れて国民がお百度石を踏まなくなったように、住民の神への信仰心は薄れつつあり、最近では車のお祓い、新築の餅撒きなども簡素化されつつある。それにくらべて、仏教徒による教会での結婚式が増えつつある。

神様を軽視していては、人生の幸せはない。神様を信じることは必要なのである。

偉大な科学者や哲学者は、なぜか未来探求のため信仰心を持っている。

それにくらべればお寺さんはお宮さんと違って、保育所や宿坊の経営など多角化を進めているが、神社の経営者は甘い感じがする。

西洋では宗教を信じる人は多いが、存在感のはっきりしない『神』を信じる人は少ない。神のない国も多い。お寺の檀家のようなものを持たずに、今後、神社が永遠に存在することができるのだろうか。

夏祭り　若いっていいな　光る肌　　幸夫